株式会社システムツー・ワン

世代を超えた知財交流は 知的財産を超えた会社の財産になる

くらしに根ざしたITを。そんな想いを抱き続けながら
介護･医療業界向けのサービスを中心に、
IoTや人工知能など、さまざまな領域に挑戦している。
自社で介護事業所を立ち上げて「現場が必要とする」システムも構築。
内閣府の知的財産戦略推進事務局が推奨している
経営デザインシートの活用企業としても紹介されている。

主な権利

2015年：特　許　第5782737号
（富士通 開放特許）
他に関連特許10件含む

会社概要

所在地：東京都新宿区西早稲田 2-20-15
高田馬場アクセス 8F
電　話：03-5291-1621
ＵＲＬ：http://www.sys21.co.jp
業　種：受託開発、製品開発、SE サービス、福祉関連事業など
設　立：1986年（昭和61年）　資本金：1,700万円

代表取締役社長：福田 佳子さん（左）
IT 事業部門 事業戦略室直轄
イノベーション推進グループ
グループマネージャー：久保 貴史さん（右）

人のくらしと心を豊かにする システムを社会に提供する

ソフトウェア業界において、1986 年にスタートした株式会社システムツー・ワン。「真の顧客ニーズを捉え、きめ細やかなサービスで、質の高いシステムを提供していこう」という想いと、将来は「人のくらし、人の心を豊かにするシステムを社会に提供する企業になりたい」という夢を抱きながら設立された。

その創業の志を大切にしながら、従来のシステム開発事業に加えて、現在大きな力を注いでいるのが介護事業である。真の現場ニーズを捉えるために 2011 年に介護事務所を開設し、現在は 2 つのデイサービスを運営。IT と介護、それぞれの部門のスタッフが垣根を越えて、人のくらし、人の心を豊かにする仕組みづくりに取り組んでいる。

人と人とのつながりの中で 有益な開放特許に出会う

介護現場の運営から生まれたシステムが、「リンケア 21 シリーズ」。地域密着型通所介護のシステムでは、毎日の利用状況をタブレットで簡単に記録しながら、介護保険の請求業務も大幅に簡略化。100 を超える多くの施設に取り入れられ、保険改正にまで対応するきめ細やかなサービスが、たくさんの介護スタッフたちに喜ばれている。

同社が知財センターの製品化コーディネーターと知り合ったのは、業界の交流会の場である。福田社長は「お会いしてから、あるシステムの特許と商標の件で相談しました。これからは知財が大事になるとも認識していましたし、そうしたことへの興味もお話ししました」と語る。

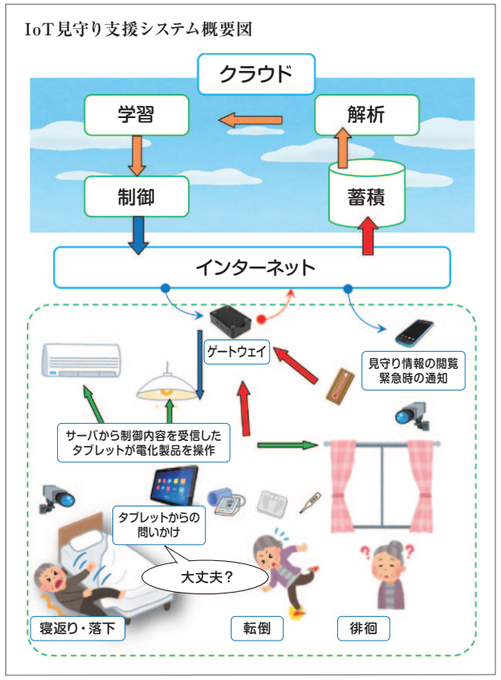
そんな同社の事業内容を理解していた製品化コーディネーターは、富士通株式会社が保有する開放特許があることを紹介した。医療機関や施設に向けた「人の見守りソリューション」で、高度なセンサーによって患者や利用者の危険を検知し、データによる行動解析や可視化処理も行う。この安心・安全のための見守りソリューションは、スタッフや家族の負担軽減にも大きく貢献する。そこで同社は富士通と契約し、この技術を自社のシステムと組み合わせることにした。

人の頭部検知のセンサーが 介護スタッフの助けになる

この見守りシステムについて、IT 事業部門の久保氏に尋ねた。「富士通の特許のどこが優れているかというと、ベッドの位置が変わってもセンサーが頭部を検知してくれるんです。ですからセンサーを固定せずに、移動させてもセットアップがいらない。それで採用を申し出ました」

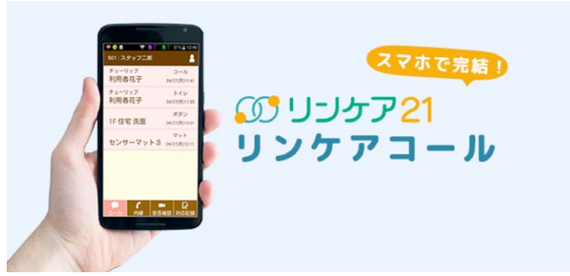
お互いの技術を重ね合わせるために、久保氏は富士通の研究所にも何度か足を運びながらコミュニケーションを取ったという。「起床・離床に加えて、転倒・転落という動きが検知できれば、ご本人にとっても介護スタッフにとっても、安心・安全のための大きな力になります」

福田社長はこの契約の機会について、「単なる技術的な話にとどまらず、私たちのような小さな会社が勝負をかけていくには、特許がいかに大切かということも、この件で気づかせてもらったと思います」と続けた。



IoT見守り支援システムの概要図。見守りによって危険を回避しながら、スタッフの負担を減らすことができる。

「リンケア21 地域密着・通所」のタブレット画面。介護現場運営から生まれた、記録や介護保険請求業務が一つになった便利なシステムである。



「リンケアコール」は、スマートフォン一つで緊急コールに対応しながら、記録も簡単にできる。

人の成長のきっかけにもなる 知財を通した連携と協業

さらに福田社長は、知財の重要性についてこのように語った。「今は、オープンイノベーションの時代ですし、1 社だけですべてをやろうとすると難しいものです。特許なども含めて考えながら、いろいろな組織とパートナーシップ組み、自社の強みを生かすという方法が良いと考えています。ですから、連携できる力、人と人とのつながりが大事ですよね。社員もみんなそう感じていると思います。これからは知財も、協業も考えながら、しっかりとしたビジネスモデルを作り上げていくことが重要だと考えています」

久保氏も、今回の開放特許の活用などによる連携のメリットは数知れないと言う。「今まで凝り固まっていたイメージが、いろいろな話を聞いているうちにほぐれてきて、柔らかい考え方ができるようになりました。自分の身になった考え方は、別のものに適用することもできます」

人のモチベーションを高める スイッチになり得るのも知財

福田社長はさらに、こう続けた。「私がうれしいと感じるのは、単に知財活用を通じた技術者同士の連携というだけではなく、若手社員が先輩技術者の話を熱心に聞いて役立てようとしてくれた、その世代を超えた交流です。それは知的財産だけではない、会社の大きな財産です」

久保氏も、福田社長の話に頷きながら「そんな世代を超えた伝播が、今度は私の部下へとどんどんつながっているような気がします。以前よりも会社が活性化していますね」と語る。

福田社長は、製品やシステムづくりにおいて知財による差別化を行うと、社員もやる気になると言う。「自分たちの仕事に誇りを持てて、モチベーションが上がるのではないでしょうか。ますますアイデアを出そうという雰囲気になってくれるとありがたいですね」

これからは IoT とアナログをプラスした介護を行っていきたいと語る福田社長。最近では、自らビューティセラピストの資格を取り、マッサージやお化粧などで高齢者に接しているという。「私たちはいつでも学習する組織なんです」と微笑む横顔からは、人のくらしをさらに良い方向へ変えていきたいという、挑戦への強い想いが感じられた。

知財センターから

情報交換しながらニーズとシーズをコーディネート

IT 関係の交流会で面識のあった会社の事業内容に、技術シーズが合うと感じて、開放特許をご紹介しました。成約に至るまでは、何度も訪問したり試作品によって検討するなど、やり取りが交わされていましたが、そのプロセスまでが会社の成長のシーズになったというお話を聞くと、とてもうれしく思います。 担当：秋葉原　木村製品化コーディネーター

取材：2019 年 9 月